

## 狂言学習を行いました（6年生）《NO.3》



### 【めあて】

- 前の人の演技をしっかりと見て、つなぐ。
- 狂言は、喜劇！  
 楽しみとウキウキ感を出す。笑顔で楽しく演じる。

### 《『柿山伏』の稽古より》

- 笑顔で、楽しそうに演じる！



畑主は、柿が大成で大変うれしい。農家の人は、放っておいたら自然に柿ができるのではなく、丹精込めて手入れをして秋の実りを迎えている。特に、今年は、甲斐があって柿が大成しているので、自慢したい。柿畑を見に来るのが楽しみで、毎日見に来ている。  
 「これはこのあたりに住まいいたす、耕作人でごさる。」は、誇りをもって言っている。「・・・見まもうと存ずる。」は、うれしい気持ちで言っている。「(自慢の)柿畑に参った」昨日よりさらによく色づいてると、うきうきしているところに、『あいた、あいた、あいた』と、ギャップが生じた。  
 名のりの部分は、柿を作っている人として、自信をもっていうことがポイント。  
 せっかく楽しい気分が、『あいた』で、予期せぬことが起こってしまった。畑主は、何が起こったのかわからない状態。すぐにことばは出ない。  
 そういう状況を考えながら、セリフを言う。

セリフを読みこんで、自分のことばにして、体から表現してほしい。自分からアクションを起こさないと、人は聞いてくれない。



山伏は、見つかったらどうしようという思いを表現する。山伏の必死さを演じる。山伏の心の動きを再現しようとする。目も動かさない！





- 畑主は、目線を高くする。
- 「とびそうな、とびそうな。」は、「飛ぶ」と「鳶」をかけている。
  - 畑主は、山伏を絶対に見ない。見ることで、山伏の高さが消えてしまう。

## 自分の受け持った役には責任をもつ

自分の役割をきちんと果たして、実際に、観客が自分の演技を観てくださって、その観客の反応を感じてほしい。

自分がやったら、やった分だけ、それに等しい反応が返ってくる。やった分と同量の分だけ返ってくる。

(本番まで) やり残してほしくない。  
これ以上教えることがないところまでやって、23日の舞台に子どもたちを送り出してやりたい。

自分が発したことば以上のものが返ってくることは、まずない。

送り手は、何らかの意思をもって演ずる。観客には、もの見事にそれが通じる。それが、舞台のおもしろさ。自分できちんと発信する。アクションを起こさないと観客からは反応が返ってこない。



中国のことばに、「**啐啄同時**」ということばがある。  
ひなが卵からかえる時に、卵の内側からひなが出ようとし、卵の外側から親鳥がくちばしでつつくことに例えている。

厳密には、ひなの方(出ようとする方)が少しだけ早い。出ようとしているひなに、親鳥が気づいて卵の殻を割る。

ひながアクションを起こす(出ようとする)意志が見えるから、親が助けることができるのである。

子どもが何らかの意思を見せたら、先生は助けられる。「助けてほしい」「上手になりたい」という意志が伝われば、先生は助けることができる。「助けてほしい」ということは、恥ずかしいことではありません。(山口先生とは)そういう関係でたいです。



- 舞台のおもしろさ  
観客に演技手の声が届くと、観客が反応する。
- 一人一人が役割をもっている。自分が(その役割を)きちんとやらないと、狂言(演目)は、つながらない。
- 「こうしたい。先生、見てもらえますか。」と言ってほしい。
- 後見のいるところは、演技をしている場所。立ち上がった瞬間から、観客の視線が集まる。

- 観客は、拍手したいと思っている。笑いたいと思っている。観客に、礼節をもって、礼儀で応える。
- 観てくださる人に、きちんと礼をする。感謝する。